野鳥 会報

No.72 2011年 10月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景　　ハヤブサ *Falco peregrinus*　ハヤブサ科

ハヤブサは空中を飛行するシギやチドリ、ヒヨドリやハトなど、鳥類を捕食して生きる猛禽である。飛んでいる鳥を約250キロの速さで急襲する採餌行動から、生活圏は広く平坦な開放的環境であり、飛行の障害となる入り組んだ構造の環境では生息することができない。ハヤブサはsea-hawk「海のタカ」とも言われるように、新潟県での分布状況は、海岸を生息地として繁殖活動する番いが多い。

多くが海を行動圏としているハヤブサではあるが、かつてから、下田の八木鼻崖、青海の海谷渓谷など内陸部での繁殖も知られている。近年、山間地の東蒲原や魚沼など、山地断崖と大きな河川の広い水面の組みあわせ環境構造をつかって生活する山地型の生息が次々と確認されている。また、県庁の高層建物上部で繁殖する都市型のハヤブサも出現した。子育てをするための断崖と、捕食行動のための開放構造をもつ環境を、繁殖のための生息条件としている鳥である。　　（石　部　　久）

温度ロガーを用いたシジュウカラの繁殖調査

研究部　小 池 重 人

シジュウカラは私たちに身近な鳥であるが、よく調べてみないと生活の様子が見えてこない。以前から私は新潟市の海岸林で巣箱をかけ繁殖調査を行ってきたが、今回温度ロガーを使うことによってより詳しくその生活の様子を確認することができたので、紹介する。

シジュウカラは森林にすみテリトリーを持つ樹洞営巣性の鳥である。明るい林にすむため住宅地でも繁殖することがある。巣箱に良く入るので直径2.7センチの丸い穴を開けた巣箱を、新潟海岸にある防砂林に約50 m間隔でかけてみた。2009年には1kmに20個かけて18個で繁殖し、巣箱利用率90%であった。新潟海岸はシジュウカラの密度が非常に高いことも利用率の高さにつながっているようである。

巣は主にコケを敷くが、中心に産座となるくぼみをつけそこにいろいろな毛などを敷き詰める。シジュウカラは平均して約9卵産卵する。初卵日を基準とした産卵開始時期はこの調査地ではふつう4月中旬から5月上旬にかけてである(図1)。

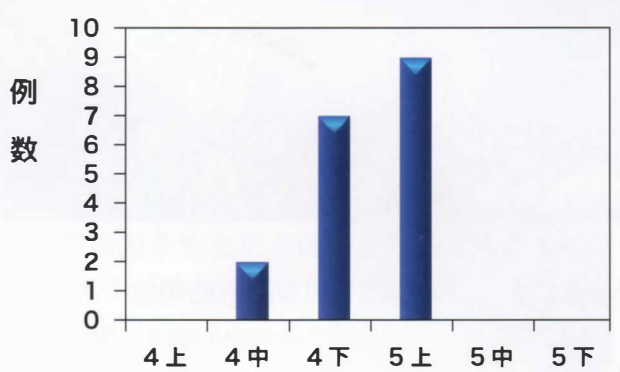


図1. シジュウカラの産卵開始時期.
(2009年；平均：4月28日；N=18).

抱卵するのは雌だけで（図2)、雄は抱卵せず雌に餌を運ぶ（図3)。そのため雌は餌を自分で取りにいく必要があまりない。最終卵を産み終えてから12日後に最初のヒナが孵化する。ヒナはほとんど丸裸である。親は昆虫や果実を与え、ヒナは成長し約2週間で巣立つ。

図2. 抱卵する雌

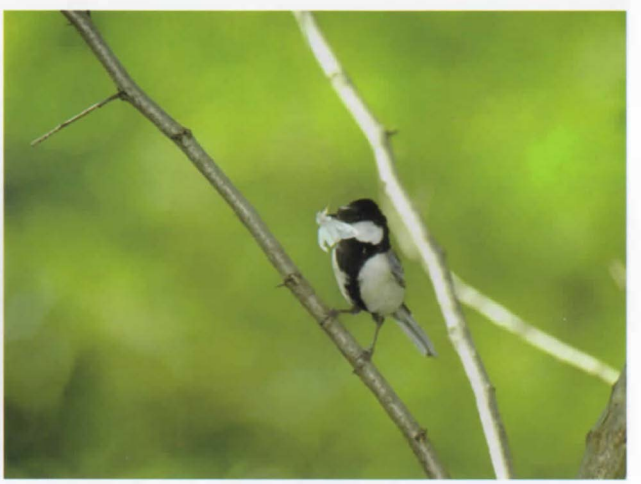


図3. 餌を運ぶ雄

近年、ビデオなどの発達により人がいなくても記録がとれるようになった。温度ロガー（図4)もその一つで、小さなボタン型の記録計を巣箱に入れておけば2ヶ月程度は温度変化を記録できる（植田ほか2007)。それによって普段は見えてこない生活の一端を知ることができる。

図4. 温度ロガー

温度ロガーを産卵が始まる前に産座の下に潜り込ませる。そしてヒナが巣立ったあと取り出し、パソコンでデータを回収する。外気温も温度ロガーで測り温度差を算出する。このようにした結果の一つが図5に示した温度差のグラフである。この巣箱は2008年のPM5で、初卵日、最終産卵日、

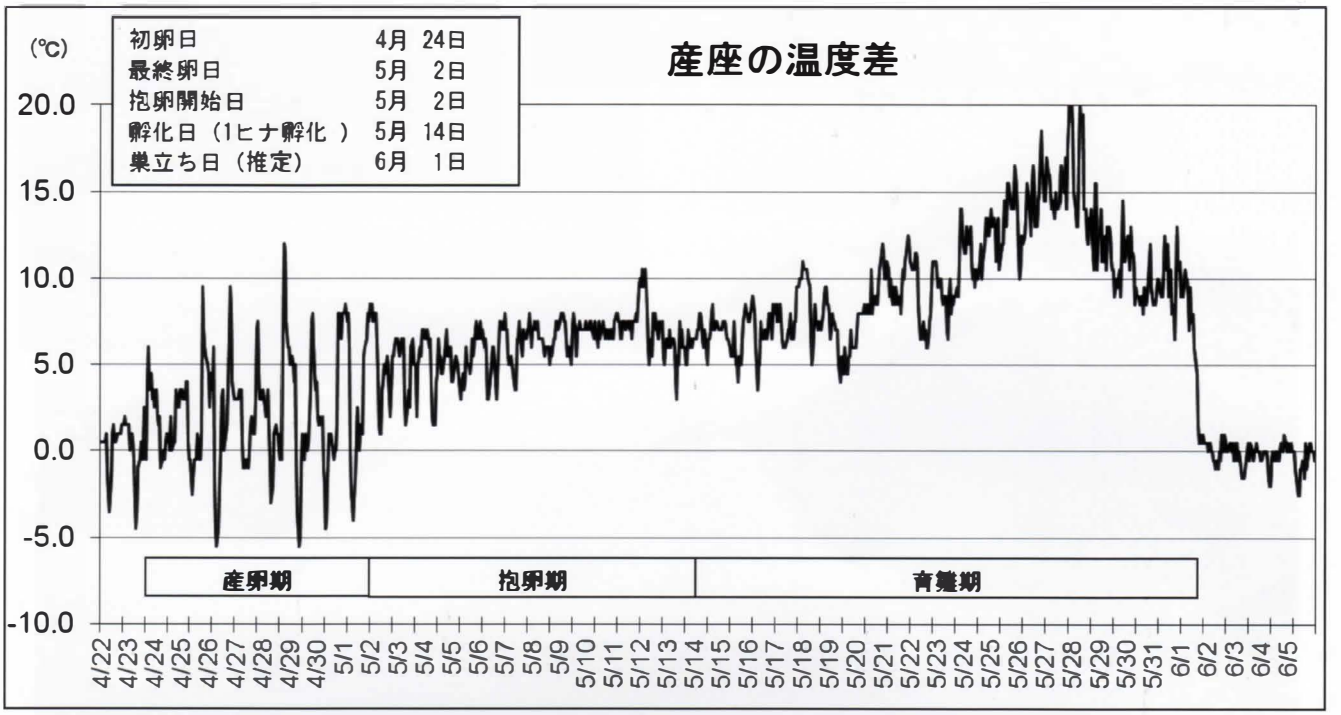


図 5. 巣箱 PM5 の産座の温度差（産座温度－外気温）.（2008 年）

産卵数、孵化日を直接確認したものである。

この結果、次のようなことがわかってきた。産卵期は温度変化が大きく夜間に温度差が上がる。この例では産卵期が始まると夜間の温度差が上がるようになるが、産卵期以前から夜間の温度差が上がる例もある。産卵を開始する前から夜間巣箱に留まるようになる雌もいると思われる。5 月 2 日の最終卵後の抱卵期は温度差が 0℃以下になることがなくなり卵を温め始めたことがわかる。ただし、このタイミングが 1 日遅くなる例もある。

2008 年の PM5 巣箱の抱卵期の温度差の変化を詳しく見ると、雌は朝の 7 時頃に長時間、午後の 3 ～ 5 時頃に短時間外に出た（図 6）。雌は雄から給餌を受けるが、ほかの理由により巣箱を出る必要があるのだろう。

育雛期はヒナの体温によりしだいに温度差が大きくなり、巣立ち前に減少し、巣立ちすると温度差がなくなる。巣立ち日は直接確認していないが温度変化から 6 月 1 日であることが推定できる。このように温度ロガーの調査により、シジュウカラの生活がより詳しくわかってくるのである。

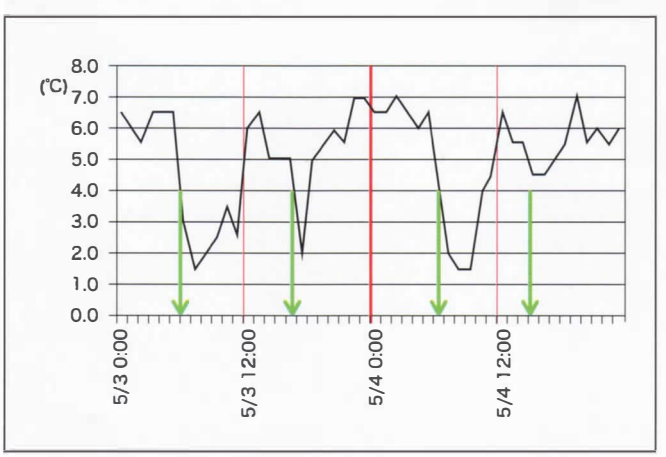


図 6. 巣箱 PM5 の抱卵期の産座の温度差の変化（5 月 3 ～ 4 日）

参考文献

植田睦之・関 伸一・小池重人 . 2007. 温度ロガーを用いた巣箱に営巣する小型鳥類の繁殖状況の自動調査の試み .Bird Research Vol. 3, T3-T11.

クマタカの日光浴

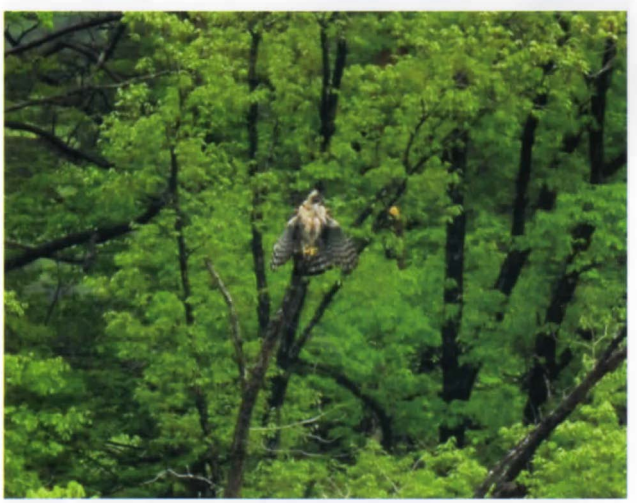
東蒲原郡阿賀町　渡 部　　通

1．クマタカ生息地　ブナやミズナラが繁る森と谷地形が存在するなど地形は複雑である

梅雨入りが間近い６月中旬のある日、いつもながら、猛禽類の調査で目的地に向かって車を走らせた。天気予報によれば、昼前には一時的な降雨があるとのこと。林道脇の広場に駐車し、ザックを背負い、機材を肩に担いで斜面沿いの登山道を歩いて行った。谷を見下ろす定点で機材を据え観察を始めたが、およそ20分もしないうちに、もくもくと雨雲が上空を覆い始め、間もなく雷鳴と共に激しい雨に見舞われてしまった。当然のことながら、小走りで車に戻り、濡れた機材の点検などするが、降雨は約40分間続いた。雨が止むと、強烈な日差しがあたり一面を

2．谷を隔て500m離れた地点のクマタカの日光浴　太陽を背にしてジッと枯れ木にたたずんでいる

3. クマタカの日光浴　腰を下ろして、尾羽を広げて乾かす。テールバンドが実に鮮やかだった

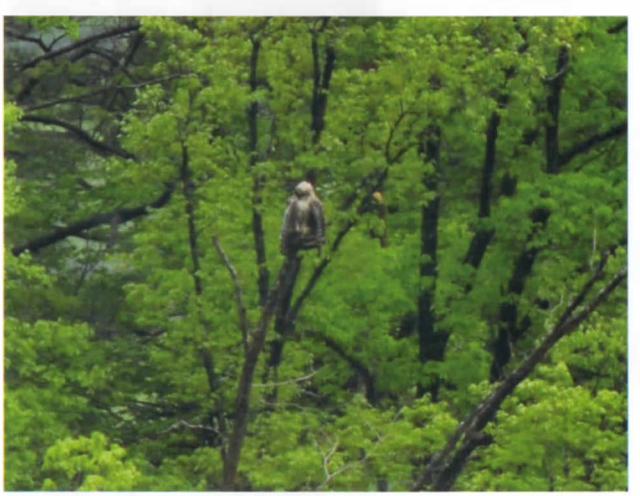


4. クマタカの日光浴
両翼の下面翼帯（バンド）が鮮やかに見られた

照りつけ、谷から湧き上がった水蒸気が、新緑の森にむせかえるようなみずみずしさを与えてくれた。

駐車した場所から谷を隔てた対岸の斜面に何か白っぽい物が見える。直感的にクマタカが想像され、直ぐにスコープで確認すると、まさしくクマタカだった。動作がどうもおかしい！　よく見ると、枯れ木のてっぺんで、両翼と尾羽を広げ、まるで日光浴をしているかのようなポーズで止まっている。先ほどの降雨によってズブ濡れとなってしまったのだろうか。太陽を背にして気持ちよさそうに全身を乾かしている。両翼を広げたままの状態でジッとしているが、時には羽づくろいや、頭をかいたり、あくびをしたりしていた。

通常、特定の木に止まって、威風堂々としたクマタカを見慣れているせいか、今回のような日光浴の姿を見るのは初めてであり、新たなクマタカのポーズを見れたことに嬉しさが倍増した。観察してから約70分後、上空を見上げて「ピッピィー、ピッピィー」と鳴いた後、羽ばたきと滑翔を交えて山の斜面の奥深くに消えていった。



5. 羽づくろい　羽が乾いてきたら、羽づくろいを始めた

新潟県野鳥観察図鑑
トラフズク（*Asio otus*）Long-eared Owl

はじめに

新潟県に生息する野鳥の生態と観察ポイントについて、これまでの調査研究、報告、探鳥会などの結果をもとにして毎号紹介していきます。

1．トラフズクの特徴

全長約40cm、翼開長約1mの中型のフクロウ。身体には縦じまの虎斑模様があり、頭部には耳のように見える羽「羽角」がある。体色には個体差があり、野外での雌雄判別は難しい。夜行性で日中は樹木でねぐらをとる。

1．トラフズク成鳥

2．生息地

県内では主に下越・中越地方平野部の農耕地にある集落の民家屋敷林や社寺林、松林などで繁殖する。近年は新潟市の鳥屋野潟公園や学校林などでも繁殖が確認されている。

2．トラフズクの生息環境

3．繁殖

自らは巣を作らず、主にカラスの古巣を利用する。巣は地上から7～10mほどにあることが多いので、冬季、木々の葉が無いときに古巣を確認しておくと繁殖期に見つけやすくなる。産卵は3月下旬から4月に行われ、5月には巣の中にヒナを確認できる。

3．カラスの古巣を利用して繁殖するトラフズクのヒナ

4．巣立ち

5月中旬から6月上旬にかけてヒナが巣立つ。巣立った幼鳥は白い綿毛に覆われ、羽角は短い。はじめのうちは巣の近くでヒナたちが一緒になっていることが多いが、日々移動範囲を広げていく。日没ころから夜間にかけて「ピー、ピー」と大きく特徴的な声で良く鳴くので、夜間調査を行うと、鳴き声をたよりに発見することができる。

4．綿毛に覆われた巣立ち直後のヒナ

5．餌

餌は主に集落内や農耕地、果樹園に生息するハタネズミ、アカネズミなどのネズミ類をはじめとする小型哺乳類が多い。また小鳥類も捕獲する。

6．ペリット

獲物は丸飲みにするため、消化できない物はまとめて吐き出す（ペリットと呼ばれる）。ペリットはねぐらとしている木の下にフンとともに落ちているため、トラフズク発見のポイントとなる。ペリットにはネズミ類の頭骨や毛、小鳥類の頭骨などが多数含まれているので、分解して調べることによって餌動物を知ることができる。

7．ねぐら

秋になると単独または小群で集落内の人家脇や公園の通路沿いのスギやカシなどの常緑樹でねぐらをとることが多い。北西から吹く強い風雪を避けることができる場所、カラスに脅かされないように人通りのある通路沿いなどの場所を選んでいるものと考えられる。近年は公園などでの観察例が増えており、秋冬期はトラフズクの観察に適している。

8．冬から春へ

厳冬期も県内に留まるが、積雪量の多い冬は減少する。1月から2月の良く晴れた夜には「ホー、ホー」という求愛の鳴き交わしの声が聞こえ、繁殖期を迎える。3月には秋冬期のねぐらが解消され、4月には抱卵が始まる。

（解説　岡田成弘）

5．巣外給餌を受ける幼鳥（左）とネズミを運んできた親鳥

6．ねぐらの下で見つかるペリット

7．秋冬期は単独もしくは小群でねぐらをとる

8．厳冬期も県内に留まる

参考文献

・新潟県の鳥　新潟県鳥類目録
　日本野鳥の会新潟県支部
・日本野鳥の会新潟県支部報 64 号
・バーダー 2009 年 11 月号 p44-45
　文一総合出版

バードウオッチング初心者の猛禽類観察記

柏崎市　大倉秀樹

鳥に興味を持つようになったのは何時頃からだろうか。子供の時には身近に２種類の鳥がいた。一つは、ツバメである。恐らく私の生まれる前から、我が家を訪れていたのであろう。毎年２回子育てをして飛び去っていくが、ヒナは何時も５～６羽いたように記憶している。親鳥は忙しなく餌を運んでいたが、その間隔はアッと言う間であったように思う。巣作りする場所は毎回変わるようで、巣の場所によっては下に新聞紙を敷いていた。何より、巣立ち前のヒナは本当に可愛くて、見飽きなかつた。

もう一つは、カナリヤである。知人から頂いた？と言うそのカナリヤは、青い円錐状の鳥かごに入っていた。

全身黄色で美しく、奇麗な声で囀っていた。水と餌そして鳥かごに敷いていた新聞紙を取り換えたりした。時には、ゆで卵を半分に切って与えていたが、何でも羽の色が奇麗になるとのことであった。カナリヤの羽の色と卵の黄身が同じ黄色であったため、子ども心に信じて疑わなかったが、今考えると誠に怪しい話である。

思い出を壊す必要はないことから、ゆで卵の件は追求しないことにしている。

今思えば、この二つの鳥との出会いが始まりであったと思うが、その後は相当の期間、鳥を身近に感じることもなく過ごしてきた。

そんなある時、紫雲町のさえずりの里を訪れる機会があった。そこには沢山の鳥が保護されていた。その中にオオタカ、オオワシ、オジロワシそしてクマタカもいたように記憶している。

運が良ければ冬の朝日池でオジロワシに会えるかも？

それら大型の猛禽類の姿は堂々としていて、何よりもその眼光は鋭かった。その時、彼等は野にいてこその猛禽類なのであろうと思うと同時に、無性に大空を飛翔している、これら大型の猛禽類を見てみたいと思った。特にイヌワシとクマタカにはその思いが強かった。

そんな思いが薄れかかった数年後、朝日池に行けば何時でも？オジロワシが見られるし、山本山に行けばイヌワシを見ることができるかもしれないと言う情報を得た。朝日池は自宅から30分位で行けるのである。その冬時間を見つけて朝日池に出かけた。平日のその池はほとんど人の姿はなかった。池の辺りに車を止めて池を見渡したその時、対岸のゴルフ場の松の木にオジロワシらしき大きな鳥が見えた。

大慌てで双眼鏡を覗いた。オジロワシだ。本当だ。ゴルフ場の人がぬいぐるみを置いた訳ではない。本物だ。双眼鏡の手が震えた。バードウォッチング初心者の私はドキドキしながら見ていた。初めて見るオジロワシは、頭を少し動かす程度で飛び立つことはなかった。辛抱強いオジロワシに根負けして帰宅した。

こうなると人間「欲」が出るものである。次は飛翔している姿を見たいと思い、その後何回か出かけたがとうとう見られずに終わった。

しかしである、その翌々年位に飛翔している姿を見ることができた。オジロワシが飛んだその瞬間、湖面の水鳥がパニックになったように大群となって飛び立った。私は、水鳥を狩るのかと思っていたが、そのまま高く舞い上がった。でかい。近くのカラスがゴミのように思えた。そのまま暫く旋回していたが、この目のオジロワシは初心者である私に、もう一つサービスしてくれたのである。

それは、湖面に突っ込んでくれたのである。魚を掴んだのであろうと思ったが、羽をバタバタす

イヌワシの飛翔

クマタカの飛翔

※写真は編集部でご用意させて頂きました。

るだけで飛び上がれないでいた。溺れるのではないかと心配したが、何回かの羽ばたきの後無事舞い上がったのである。良かった。素人の私はすごい場面を見たと一人興奮していた。

もう一つの観察ポイントである山本山へも年に2～3回であるが出かけた。イヌワシを見ることも無く数年が過ぎた昨年、数10羽のカラスに追われているイヌワシの幼鳥を見ることができた。

初めてのイヌワシは双眼鏡を手に取る間もなく、肉眼でしかその姿を追うこができなかった。両翼に白いものが確認できたことから幼鳥であろうと思った。今年も9月のある日、ちぢみの里方向へと飛んでいるイヌワシの幼鳥を見ることができた。胸踊った。今回は、双眼鏡で見ることができたが、以前に見たイヌワシよりも両翼の白さが目立っていたように思えた。いずれも僅かの時間であったが、幸運であった。

実は、もう一つの強い思いがあるクマタカも一度だけ見たと思っている。数年前、松之山町において見たその鳥は、ノスリよりも大きく、何より翼が広く、白っぽく見えた。後日、柏崎のKさんにお会いすることがあったので、「かくかくしかじか」と話したところ、親切なKさんは「それはクマタカでしょう。良かったですね。」と話してくれた。時間にすれば僅か3秒位だと思うが、今でもあの鳥はクマタカだと信じている。

大型の猛禽類を見ることは難しいことと思う。特に私の大好きなイヌワシ、クマタカの飛翔を目の前で見ることなど不可能に近いかもしれない。しかしゼロではないと思っている。この三つの体験から、夢は持ち続け、見続ければ叶うものであると改めて感じた。

いつの日か山岳の王者そして森林の覇者である、あの神々しいイヌワシ、クマタカに再会できる日を夢みて双眼鏡を持ち続けよう。

たまたま撮ったミゾゴイの写真

「山菜採りの最中、たまたま逃げないピンクの鳥がいたので写真に撮ったが、名前がわからない」と電話があった。

ピンクの鳥なんかフラミンゴくらいしか頭に浮かんでこなかったが、届けられた写真を見てびっくり！

ピンクかどうかは別として、近年絶滅が危惧されている珍鳥ミゾゴイだと伝え、写真を借りる事と相成った。

彼は日本自然保護協会の自然観察指導員でもあり、きのこが専門。山菜採りの最中にもカメラを持参とは頭が下がる。（平成23年6月12日　柏崎市小杉にて　撮影者　池田　裕さん）

ミゾゴイ

中部ブロック会議参加報告

事　務　局

本年度の中部ブロック会議は6月25日、26日に富山県立山町の弥陀ヶ原ホテルで開催されました。参加者は10県15連携団体、48名で本会からは伊藤指導部長、本間(事務局)の2名が参加、財団本部からは安西理事と葉山自然保護室長の2名が出席しました。日本野鳥の会富山の酒井代表より「皆さんにライチョウを見ていただきたく立山で開催しました」との挨拶があり、参加連携団体の自己紹介のあと本部挨拶、引き続き協議に入りました。◎鳥インフルエンザについて（葉山室長）◎平成22年度定例理事会報告（高木理事）◎希少鳥類生息調査について（甲府支部）◎中部ブロックの今後については、中部ブロックは10県21支部から成り、各ブロックの中で最も広域で連携団体数が多くまとまりづらいのでは？2ブロックに分けてはどうかとの提案があったが、現状のままでということになった。◎会員減少、後継者育成については、長野支部ではバードフェスタで探鳥会を行ったり公民館などで出前講座を行い会員を増やす努力をしているとのこと。

最後に次年度開催県の山梨県富士山麓支部から来年6月2日、3日にお待ちしておりますとのことでした。協議の後「厳しい寒さに適応した鳥・ライチョウ」と題して富山雷鳥研究会の松田勉氏より講演がありました。二日目は立山カルデラ展望台方面へ早朝探鳥に出かけましたが、目的地近くまで行った所、大雨になり引き返す事になり残念でした。ブロック会議解散後、雪の室堂へ案内していただき、前日講師の松田氏執念で探して下さいましたライチョウに会う事もでき、有意義な二日間でした。

会議風景

早朝探鳥会の様子

室堂はまだ雪の壁でした

室堂のライチョウ

フォトアルバム

６月　三川探鳥会

ヒミズ

ハヤブサ繁殖地　本尊岩

ヤマドリのフン

サルのフン

モリアオガエル

珍しいオヒョウ

新潟県探鳥地ガイド **雪国の鳥をたずねて**

越後七浦海岸　海の風に イソヒヨドリが歌い ハヤブサが飛ぶ

探鳥地の様子

佐渡海峡の向こうに佐渡が見え、日本海の波の音を聞きながら、越後七浦海岸を海沿いに観察する。角田浜から角田岬の灯台を見ながら、変化のある岩崖を通り、五ヶ浜までを歩く。

緩やかにくねる海岸は、右手に日本海が広がり、左側はそそり立つ断崖の岩場である。初夏の頃は岩場にオレンジ色のスカシユリ、紅紫色のアサツキ、白いハマボッス、黄色のメノマンネングサ、ピンク色のハマヒルガオの花が咲く。海と季節、花と海辺、海岸の鳥の生息、観察は四季を通して興味深い。

鳥の観察

海岸線の探鳥では、季節によって出現する鳥の種類が異なる。繁殖期に限らず一年を通して見られる種で、興味をひく鳥がイソヒヨドリ（ツグミ科）とハヤブサ（ハヤブサ科）である。

ハヤブサは、海の断崖を主要な生活地として、繁殖期には２番いが間隔をおいて営巣している。捕食する獲物は季節によって鳥種は異なるが、子育て時は、ドバトとムクドリが多い。

ツグミ科のイソヒヨドリは、飛びつき法によって採餌する。ヒナへの給餌は大きなムカデを捕食し与えていることが多く観察される。

（石部　久）

イソヒヨドリの生息地

イソヒヨドリの捕食法

海の風にのって飛行するハヤブサ雌

ムカデを捕食したイソヒヨドリ雄

発　行　2011年10月31日　No.72
発行人　石部　久　　編集者　小林成光、浦部良雄、千葉　晃
日本野鳥の会新潟県
事務局　〒950-0941 新潟市中央区女池３丁目13番25号
TEL 025-285-2405　本間由紀子方　〈振替口座〉00610-1-6002